The International Association for Integration, Dignity, and Economic Advancement

IDEAジャパン　ニュースレター

ハンセン病患者・快復者や、すべての人々の尊厳の確立を目指して

2015年　3月10日発行 19号

写真展会場を訪れたドリアン助川さん（右）と女優の中井貴恵さん（左）。中央は森元美代治・美恵子夫妻

NPO から NGO へ～再スタートします！

理事長　　森元美代治

春光うららかに花の便りも聞かれる今日この頃、皆様にはいかがお過ごしですか、お伺い申し上げます。

さて、IDEA ジャパンは設立以来 11 年半の歩みを続けてまいりました。すべて暗中模索の中でゼロからのスタートでしたが、年を追うごとに会員も増え、また貴い寄付金等によって様々な活動に取り組み、発展させることができました。心から感謝申し上げる次第です。

２月初めに IDEA ジャパンは、設立 10 周年を記念して「世界ハンセン病の日」のサイドイベント企画として、国立ハンセン病資料館で、シンポジウム「ともに生きる　尊厳の確立をめざして」と写真展「輝いて生きる」を開催することができました。会員の皆様をはじめ常日頃支援してくださる方々が多数参加してくださいまして、大きな成果を上げることが出来ました。

これまで IDEA ジャパンは、海外支援事業では、インド、ネパール、フィリピン、タイ、中国、インドネシア等の子弟教育費助成（奨学金）や、ハンセン病快復村（コロニー）の生活改善資金を助成してきました。国内においては、ハンセン病に対する偏見・差別除去のための啓発事業の一環として講演会・写真展開催など積極的に行ない、またハンセン病市民学会はじめいろいろな集会にも参加して、大きな成果を上げることができました。お陰さまで IDEA ジャパンも「知る人ぞ知る」存在となり、その法人格としての社会的評価も高まりつつあると自負しております。

ようやく軌道に乗りかけた IDEA ジャパンであり、また国内外に積み残しの事業は山積しており、できることならこれまでの事業を継続・推進して行きたいところですが、舵取りを任されている私も 77 歳の加齢とともに、身体のあちこちに傷みを生じ、体力の減退も著しくなってきました。理事の皆さんとも相談の結果，IDEA ジャパンの NPO 法人としての活動は来る３月 31 日にいったん閉じることになりました。まことに残念ですし、またこれまでご支援いただいた多くの皆様方に申し訳なく思います。しかし４月からは私の健康が許す限り、NGO として IDEA ジャパンを再スタートさせる所存です。引き続きご支援とご指導を仰ぎたいと存じます。何とぞ、よろしくお願い申し上げます。

同志社女子高生の全生園訪問記

岡野　風紗

１学期に授業でハンセン病の大まかなことは習っていたので大体は知っているつもりでしたが、実際に話を聞いて、驚かされることが多くありました。まず初めに森元先生が「この資料館は、ハンセン病がどのような病気であるかではなく、どのような歴史を辿ってきたかを知ってもらいたくてつくった」とおっしゃいました。実際に患者として凄絶な隔離、差別を受けて来たからこその言葉だと重く受け止めました。

資料館で再現されていた着物やお金は、患者が療養所の外に出られないようにする目的だという、徹底した隔離政策に衝撃を受けました。寮舎は８人部屋で、展示を一目見ただけで窮屈そうだと感じるほどでした。資料を読んだだけではわからないところとか資料に書いていないことも、森元先生が説明してくださったので、深いところまで知ることができました。

私が感想を森元先生に言うと、先生は「百聞は一見に如かずとは、まさにこのことだよね」とおっしゃってくださいました。実際に資料館の中を見て、習っていたものよりももっと複雑で凄絶で、驚きの連続でした。きっとこの資料館見学という体験は、私の一生の宝物になると思います。

２日目は全生園祭で IDEA ジャパンのバザーのお手伝いをしました。私自身, 初の接客ということもあり、すごく緊張していました。でもお客さんが皆さん温かくて、すぐ緊張がほぐれ、元患者さんや地元の子どもたちと交流することが出来ました。今でも少しは差別が残っていると思いますが、将来的に差別がなくなり社会の理解がより生まれたらいいなあと思います。

この２日間，森元ご夫妻をはじめ多くの方々と出会い、貴重な体験をすることができたので、参加して本当によかったと思います。

久志　はるの

今回の全生園訪問では、普段の生活ではなかなか経験することができないことを体験できました。１日目は森元先生のお話をお聞きすることができました。今まではハンセン病については、ビデオを通してしか学んだことがなく、私とは遠い存在であるものでした。しかし資料館や全生園を訪問することによって、身近なものであると感じるようになりました。資料館ではハンセン病の患者さんたちの生活がよくわかるよう展示されていました。衝撃的なものもあり，目をそらしたくなるようなものもありましたが、これは現実的に起こったことであって、真剣に考えなければと思い、森元先生のお話を聞きました。元患者さんのお話を聞く機会などめったにないことなので、貴重な体験が出来ました。

２日目は IDEA ジャパンのバザーをお手伝いしました。このバザーを通して全生園の中の様子を知ることができました。

山本　綾夏

私が今回多磨全生園訪問に参加したのは、去年参加した先輩がとても良かったと勧めてくださったのがきっかけです。１日目は、森元先生自らの体験談や裏話などを交えた説明を聞きながら資料館を見学しました。もちろん資料館だけでも十分に新しい発見が多かったのですが、もっと裏の話や森元先生の意見を聞けて、とても貴重な体験になりました。

２日目は、全生園祭で IDEA ジャパンのバザーのお手伝いをしました。普段生活しているだけではわからなかった全生園内の様子や、元患者の皆さんと触れ合えて良かったです。学校で習って想像していたのとはまるで違い、全生園はとても開放的で広々としていて、地域との交流も盛んなので驚きました。「昔はこんなじゃなかったけどね。最近やっと交流が盛んになったんだよ。よかったねえ」と、森元先生はおっしゃっていました。私はほんとうによかったと思いました。

私は今回多磨全生園を訪問して心から良かったと考えています。この世に五体満足で生まれてこられたこと、これまで特に大きな病気もせずに暮らしてこられたことに改めて感謝しました。今回の経験を生かして、一つ大きくなれたなと思いました。

2014年11月3日、バザーに参加した同志社女子高の生徒さんと先生方

佐藤　真衣子

中学生の頃から学校で何度もハンセン病について学んできて、少しは知識を持っているつもりでした。しかし机上の空論というような感じで、出来事を実際に体験した方にしか分からない話を森元先生から聞くことができて、とても貴重な経験をさせていただきました。今年は特に少人数グループで、森元先生に資料館を案内していただいたので、より聞きやすく、深く知ることができたのではないかと思います。

森元先生からお聞きしたお話は、ハンセン病患者であるかそうでないかは関係なく、これからを生きる私たちにとってどのように生きるのかを考えさせるものでした。私が一番強く印象に残っているのは、「トライする姿勢」です。森元先生やたくさんの元患者さんたちが世間の逆風や反対にあっても、あきらめることなく政府と交渉を続けたからこそ、今ハンセン病への理解が広がろうとしているのだと思います。しかしまだ偏見の目が残っているのも事実です。ですから、これから少しでも偏見のない社会が来てほしいと思います。

この経験を通して、物事を「これは悪いことだ」というように通り一遍に考えるのではなく、表に出ていることだけではなく、その裏に隠れている人びとや、違う側面を探そうと意識するようになりました。このことを忘れず、意識し続けられるようにします。本当に普通の高３（高校３年生）が経験できないことを体験できました。ありがとうございました。

河方　美柚

今回の訪問を通して、ハンセン病へのより深い理解はもちろん、考えさせられたことが多くありました。森元先生は私たちに教科書や資料などでは学ぶことができない貴重なお話をしてくださいました。「国が定めた法律や政策で人生が大きく変わってしまう。こんなに悲しくて残念なことはない」と私は強く思いました。おそらくハンセン病になっていなかったら、やりたいこともたくさんあったでしょう。法律は国民の生活や人権を守るためにあるのに、その法律が人びとの自由を奪ってしまっていたということは、何か矛盾があるような気がします。またハンセン病以外のことで、法律によって困難な状況にある人はいないかと考えてみようと思いました。

私が一番驚いたことは、療養所に入って絶望の中であっても、生きる価値を求め、趣味や文芸活動など生きがいを探し続けられていたことです。普通に考えれば、そのまま落ち込んで何もやる気がなくなると思います。しかし資料館の展示では、たとえ目や耳、手足が不自由でも、絵画、陶芸、物づくりなどに励んでおられる方々が紹介されていました。その姿は、ハンセン病の患者さんはもちろん、私たちにも大きなパワーを与えてくださいました。

不自由なく生活し、自分のやりたいことに挑戦できることに感謝し、困っている人に手を差し伸べる勇気がある人になりたいと思いました。

最後に挨拶する森元美恵子さん。左が森元美代治理事長

笹川記念保健協力財団による「世界ハンセン病の日」記念のサイドイベントに応募したところ、IDEAジャパンの企画への助成が決まり、国立ハンセン病資料館でシンポジウムと写真展が実現しました。森元理事長夫妻、佐久間建理事（教師）、村上絢子事務局長（ライター）がそれぞれの活動を総括して報告。活発な意見交換ができました。参加者７０人。

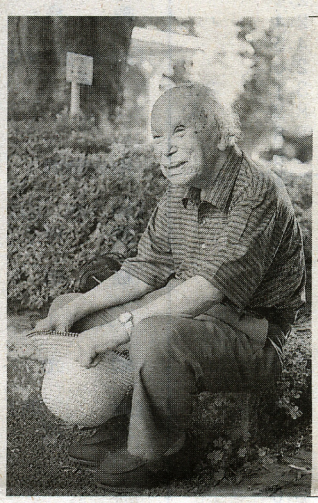
朝日新聞の2月5日付け朝刊東京版に掲載されたお知らせ記事

朝日新聞 2月5日付

ハンセン病 尊厳訴えシンポ

7日に回復者や支援者ら

東村山 6～8日には写真展



11月に100歳になる鈴木禎一さん。回復者や支援者でつくる「ハンセン病首都圏市民の会」代表＝2010年7月、東村山市の多磨全生園、八重樫信之さん撮影

ハンセン病回復者や支援者でつくるNPO法人「IDEAジャパン」は7日、国立ハンセン病資料館（東村山市青葉町）でシンポジウム「ともに生きる 尊厳の確立を求めて」を開く。世界ハンセン病の日（今年は1月25日）の関連行事。

IDEAは各国のハンセン病回復者や支援者らが1994年にブラジルで結成し、現在三十数カ国に拠点がある。日本支部にあたるIDEAジャパンは2004年設立。各国のハンセン病療養所を訪れて交流を重ね、中国やフィリピン、インドなどアジア各国の回復者に生活支援資金を提供するなどの活動を続けてきた。

シンポでは理事長で回復者の森元美代治さん(77)が国内外で病気に対する偏見の解消や患者の尊厳回復に努めた半生を語り、事務局長の村上絢子さん(71)がこの10年の活動について報告。昨秋に著書「ハンセン病と教育」（人間と歴史社）を出版した小学教諭の佐久間建さん(55)は、授業でハンセン病を題材に人権や命の尊さを伝えてきた取り組みについて述べる。

6～8日には資料館ロビーで写真展「輝いて生きる」を開催。写真家の八重樫信之さん(71)が96年から国内外の療養所で撮影した回復者らの写真41枚を展示する。シンポ、写真展とも入場無料。

（編集委員・北野隆一）

森元美代治・美恵子夫妻の十九年

写真展「輝いて生きる」から

ネパール・コカナの森元夫妻。この村では療養所やクリニックの周辺に回復者が集落を作って住んでいた／1996年3月（写真上）

入所者減による閉鎖に反対するため、各国のIDEA会員とデモに参加／1999年3月、米国のカービル療養所（写真左）

2013年の全生園祭りのバザーで（写真下）

インドのハイデラバードで開かれた国際ハンセン病学会に出席。各国のIDEA会員と／2008年2月

＊トピックス＊

理事二人の新著です

（1）佐久間　建著　　『ハンセン病と教育』
ハンセン病隔離政策に加担していった教師と教育界の歴史的過ちを検証し、ハンセン病を”生き抜いた人びと”の姿から、子どもたちに「いのち」と「人権」の尊さをどう伝え、育むかをともに考える。

人間と歴史社刊　定価（本体 2,500 円＋税）
電話：03-5282-7181　Fax：03-5282-7180

（2）西尾雄志著
『ハンセン病の「脱」神話化
　　ー自己実現型ボランティアの可能性と陥穽』
ハンセン病に対する差別はなぜなくならないのか。ハンセン病の差別に関して、中国ハンセン病回復村での学生らの活動に焦点をあて、差別をなくすためのカギを探る。
皓星社刊　定価（本体 2,800 円＋税）
電話：03-5306-2088　Fax：03-5306-4123
郵便振替：00130-6-24639

高幡不動尊様から寄付

毎年、高幡不動尊様から多額の寄付をいただいています。また同志社女子中・高校からも年に何度もバザーの収益金を、その他、多数の方々からも寄付を頂戴しています。これらの寄付金は、海外の回復者たちの生活向上や奨学金に使わせていただいています。

高幡不動尊の小澤尚紀様（右）から寄付金を受ける森元理事長

発行責任者　：森元　美代治
特定非営利活動法人 IDEA ジャパン
http://www.idea-jp.org/
事務局：
〒 204-0012　東京都清瀬市中清戸 4-847
　　中清戸 4 丁目アパート 7-605
Tel&Fax 0424-93-6105

編集後記：村上　絢子

２月のシンポジウムと写真展の企画は、IDEA ジャパン 10 年間の活動を振り返る記念すべき機会となりました。森元理事長夫妻の、いまだに年齢を感じさせない、国内外での活発な活動には目をみはるばかりです。また各会員の地道に取り組む姿勢が「ともに生きる社会」をめざす IDEA ジャパンの”底力”のように思えます。NGO に衣替えしても、IDEA ジャパンをこれまで同様支え続けて下さいますようお願い申し上げます。

E-mail　info@idea-jp.org
FAX　04-2925-8165